

3-3 豊明市放課後教室の実践

3-3-1 外国籍児童の学習支援を実施して

(伏屋一幸：豊明市役所 市民協働課)

(本市の外国籍市民の状況)

本市役所は、4年前の機構改革により市民協働課が新設され、増加する外国籍市民の行政施策について取り組むこととなった。本市の外国籍人口は平成14年以降急激に増加し始め、平成14年末の1,065人に対し、本年11月末では2,398人となった。都市再生機構の「豊明団地」を擁する本市は、団地の賃貸料の安さや、保証人が不要などの条件から、外国籍の人たちが急激に増えており、今後もこの傾向が続くものと予想される。こうしたことから、豊明団地には多国籍の人たちが集住するようになり、さらに、最近の定住化傾向から、本国から家族を呼び寄せ、家族ぐるみで居住する人たちが増加した。

これらの多国籍化や定住化は教育・医療・労働など様々な分野で複雑な問題を引き起こし、とりわけ子供の教育についての問題がクローズアップされてきた。

(放課後学習支援への取り組みのいきさつ)

外国籍の子供たちの第一の問題は不就学である。不就学となる理由は、多言語での情報提供不足から親が子供の就学手続きのやり方がわからない。親が子どもの教育に興味がない。せっかく学校に入っても授業についていけず、ドロップアウトしてしまう。など様々である。本市としてはこれらの問題を解決していくため、3年前から広報誌の多言語化による情報提供や、就学通知の多言語化、外国籍市民を集めて直接意見を聴くタウンミーティングなどを開催していたが、ドロップアウトについての対策は残念ながら講じていなかった。教育現場からは、学校に外国籍の児童・生徒が増えその対応に苦慮しているとの声がしばしば聞かれていた。そんな折、偶然愛知教育大学が、放課後児童の学習支援を文科省の支援を受けて実施しているとの情報を得、さっそく愛知教育大学に連絡を取り、同事業の本市への導入をお願いしたところ快諾を得ることができ、事業を開始することができた。

(学習支援の実際)

学習支援は、教育委員会との打ち合わせにより、外国籍の子供たちが集住している豊明団地地区の双峰小学校で行うこととなった。当初、学校関係者は同事業の必要性は認識しているものの、市内での実績がなく、ノウハウもなかったため、実際に参加する児童がいるのか 保護者への通知や集約の仕方はどうするのか。 下校時の安全対策はどうするのか。 参加学生の交通手段はど

うするのか。など様々な疑問や不安を口にしていた。当課としてもそうした不安を抱えていたため、先進校である知立市立知立東小学校への視察や、双峰小学校や大学との打ち合わせや連絡を綿密に行い事業に備えた。その結果、実際事業が始まってみると、学校や参加の学生の皆さんの協力により、ことのほかスムーズに運び、参加者も当初の 6 名から 10 名に増加した。授業中の子どもたちの様子も非常に生き生きしており、傍からではあるが楽しそうにみえたことは、事業にかかわった一人として喜びを感じた。子どもたちが学校にきて「学ぶことに楽しさ」を体験できることは、今後の彼らの成長に良い影響を与えるに違いないと思う。

(学習支援のこれから)

こうして無事に事業が開始されたのであるが、学習支援の担い手である愛教大の学生の方々の日程の都合と、学校の行事の都合との兼ね合いで、年間 15 回程度しか授業が展開できない点や、集団下校の関係で 4 ~ 6 年生が受講出来ない点、今後予想される急激な受講対象者の増加への対応や、他校の児童をどう取り扱うかなど容易に解決できない課題も多くある。

幸いなことに、同事業は来年度から教育委員会が主体となって運営していくことになっており、各学校間の調整や新たなカリキュラムの構築などの展開が期待できるので、是非こうした課題を克服し、外国籍の子供たちが楽しく学べる環境を作ってほしい。そうした環境を作ることが日本人児童にもよい影響を与え、学校内での多文化共生を可能にするもと考える。

最後に、この事業を快く引き受けてくださった愛知教育大学の岡田教授を始め、多数の大学院生・学生の皆さんにお礼を申し上げたい。

3-3-2 豊明市立双峰小学校放課後教室の実施

(佐方貴文：学校教育専攻国際理解教育領域 M 2)

(宮崎宏美：学校教育専攻国際理解教育領域 M 1)

(1) はじめに

本稿は、2007 年度に愛知教育大学日本語教育講座と豊明市役所市民協働課が実施した、豊明市立双峰小学校における放課後日本語教室の実施について、どのような経緯で教室が開始され、どのように教室運営を行っているかについて報告するものである。

(2) 教室開始までの経緯

この教室は、偶然の出会いから生まれたものである。事の発端は、2006年夏に豊明市役所市民協働課が実施した外国籍世帯へのアンケート調査の配布の手伝いを筆者（佐方）がさせていただいたことに始まる。その際、職員の方に大学で行っている現代GPのプロジェクトについてお話しした。職員の方は、話の中で特に知立東小学校で行われている「マスマス教室」に興味を持たれ、ぜひ豊明でも同じような教室が開けないだろうかとの要請を受けたのがきっかけである。その後、市民協働課の職員の方々に知立東小学校を訪問していただき、「マスマス教室」を実際に見ていただくなどして、豊明で行うための試案を練っていただいた。教室の開設場所としては、市内で一番外国人児童が多く在籍している双峰小学校がふさわしいということになり、着々と準備が進められた。

2007年3月8日に、双峰小学校にて大学、市役所、小学校の三者を交えて放課後教室を開設するための話し合いがもたれた。支援の内容としては、知立東小学校のように算数の指導を中心に行うのではなく、来日または入学間もなく日本語力がまだ十分でない児童に対しての日本語指導を行うことに決まった。学校側からは、特に子どもの安全面の問題について、どのように下校させるか注意を払わなければならない、スムーズに行うにはどのようにしていけばよいのかという課題が残った。また、支援を行う大学側の要望として、豊明市側に学生の送迎をしていただけるよう要求した。この話し合いの結果、2007年5月30日から6月27日までの5週間の毎水曜日に双峰小学校での放課後日本語教室が開始されることが決まった。

（3）放課後日本語教室について

豊明市立双峰小学校での放課後日本語教室は、2007年12月現在で、以下の表1の通り実施している。

【表1：双峰小学校放課後日本語教室の実施期日】

回	実施期日	実施時間	対象児童数	支援学生数
第1回	5月30日(水)、6月6日(水)、13日(水)、20日(水)、27日(水)	15時5分～15時50分	8名	7名
第2回	9月26日(水)、10月3日(水)、31日(水)、11月7日(水)、14日(水)	15時5分～15時50分	10名	8名

第1回目の対象児童と支援内容

対象児童：1年生3名、2年生3名、3年生2名、合計8名

支援内容:5月30日にテストを行った結果、児童間で日本語能力に大きな差が見られた為、レベル別に3クラスを設置した。クラス1は全く日本語が話せないクラス。クラス2は単語レベルで日本語が話せるクラス。クラス3は生活語彙をほぼ習得しているクラスである。



クラス1では、日本語学級¹(凡人社)を参考に下記の表のように行った。

実施日	内容
5月30日	・インタビューテスト
6月6日	・あいさつ ・ことば(体の部位) ・～が痛い ・ある、ない
6月13日	・あいさつ ・いる、いない ・右、左、真ん中
6月20日	・ことば(教室内を歩き回りながら、持ち物) ・いる、いない ・～はどこ ・忘れた、貸して、ありがとう
6月27日	・ことば(家族、左右、上下、前後、教科名、大きい、小さい) ・タスク(カルタ) ・プリント(言葉さがし)

クラス2では、日本語学級¹(凡人社)を参考に下記の表のように行った。

実施日	内容
5月30日	・インタビューテスト
6月6日	・あいさつ ・ある、ない ・忘れた、貸して、ありがとう
6月13日	・ことば(体の部位、食べ物) ・復習(忘れた、貸して、ありがとう)

	<ul style="list-style-type: none"> ・食べる、食べない、飲む、飲まない ・形容詞
6月20日	<ul style="list-style-type: none"> ・形容詞 ・これ だれの？（日本語学級¹） ・本「くじらぐも」
6月27日	<ul style="list-style-type: none"> ・反対言葉 ・学習用語確認 ・プリント

クラス3では、下記の表のように行われた。

実施日	内容
5月30日	<ul style="list-style-type: none"> ・インタビューテスト
6月6日	<ul style="list-style-type: none"> ・カタカナプリント ・算数文章問題 ・タスク（体育の授業の変更を聞く）
6月13日	<ul style="list-style-type: none"> ・算数文章問題 ・国語（文章読解） ・プリント（言葉探し）
6月20日	<ul style="list-style-type: none"> ・算数文章問題 ・国語（文章読解） ・絵本「なつのいちにち」 ・カタカナプリント
6月27日	<ul style="list-style-type: none"> ・算数文章問題 ・国語（文章読解） ・絵本「ねずみくんのチョコキ」 ・ディクテーション

反省点：インタビューテストだけでは児童が持っている学力を図りきれず、実際の日本語能力より下のクラスに配当してしまった児童もいた。また、児童たちは何を理解していて、何がわからないのかがわからず、手探りで教材を準備していった為、準備していた教材がすぐに終わってしまう日もあった。

終了後、次回からは1ターム5回という短い期間で効率よく教えるために、また学生ボランティアの負担を減らし、専門的な知識はないが外国人児童の支援活動に興味を持っている学生が参加しやすいように、カリキュラム作成を行

うことにした。

カリキュラム設定



第1回目の反省点からカリキュラムを作成した。これは、『日本語学級1, 2』（凡人社）より作成したものである。5つのレベルを作成し、下記の表2のように作成した。

【表2：豊明市立双峰小学校用のクラス別カリキュラム】

< class1 > 『日本語学級1』より選出

時間	日本語学級	内容
1	第1課 第2課 第3課 第4課	挨拶（おはようございます・こんにちは・さようなら・いただきます・ごちそうさまでした） いい/だめ 数（1～10） 鉛筆/消しゴム 言葉（筆記用具）
2	第5課 第6課 第7課	ある/ない 数（11～20） いる/いない
3	第9課 第11課	ぼく/わたし きて/みて/きいて 言葉（書いて・読んで・立って・座って・言 ってなど） 言葉（学校）
4	第25課 第12課	いたい こう・ちがう・そう 言葉（体の部位）
5	第13課 第18課	勉強 わかる/わからない

	言葉（教科名）
--	---------

< class2 > 『日本語学級¹』より選出

時間	日本語学級	内容
1	第 14 課 第 15 課 第 29 課	なんようび きのう/きょう/あした たべる/のむ 言葉（食べ物）
2	第 19 課 第 20 課 第 22 課	なんにち？ おなじ/ちがう ここ/そこ/あそこ
3	第 21 課 第 23 課 第 24 課	これ だれの？ みぎ/ひだり/真ん中/ うえ/した/まえ/うしろ
4	第 26 課 第 27 課 第 30 課	でんわ いる/いない おおきい/ちいさい
5	第 28 課 第 16 課	わすれた/かして/ありがとう なんじ？ 言葉（復習+ ）

< class 3 > 『日本語学級²』より選出

時間	日本語学級	内容
1	第 1 課 第 2 課 第 3 課 第 4 課	名詞文の肯定形・否定形 名詞文の疑問形 主題となる事物を示す助詞「は」 同じ事物を示す助詞「も」
2	第 6 課 第 8 課 第 9 課	これ それ あれ どれ この その あの どの + 名詞 所属を示す助詞「の」
3	第 14 課	言葉（動詞） 行為対象を示す助詞「を」

	第 12 課 第 13 課	動詞文の否定形/方向を示す助詞「へ」 手段を示す助詞「で」
4	第 21 課 第 22 課 第 23 課	言葉（動詞） 動詞文の肯定形過去 動詞文の否定形過去 共同行為者を示す助詞「と」
5	第 16 課 第 17 課 第 26 課	言葉（形容詞） 形容詞文の肯定形・否定形 形容詞の語彙補充 形容動詞の肯定形・否定形

< class 4 > 『日本語学級 2』より選出

時間	日本語学級	内容
1	第 28 課 第 29 課 第 37 課	～を します ()は()で()を()ます。 助数詞のみ
2	第 34 課 第 35 課	授受表現 「あげる」「もらう」 授受表現 「くれる」
3	復習 第 36 課 第 37 課	これ、それ、あれ、この、その、あの 存在を表す言い方(います・あります) 助数詞/数量疑問文
4	第 42 課 復習	感情の向く方向を示す助詞「が」 あげる、もらう、くれる (言葉)食べ物、動物、教科名
5	第 43 課 第 44 課	物を欲する言い方 行為を欲する言い方 動詞の連用形+たい

< class 5 > 弱点補強クラス

内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ ひらがな、かたかな、漢字練習 ・ 文章読解 ・ 文章問題 ・ 語彙数を増やす <p>プリント学習を中心に個別指導を行う</p>
----	--

第 2 回目の対象児童と支援内容

対象児童：1 年生 3 名、2 年生 4 名、
3 年生 3 名、合計 10 名

支援内容：上記のカリキュラムに沿って授業が行われた。また、各クラス、必要に応じ補助プリントを準備し、試験的に宿題を出すようにした。

今回は、すべてのクラスは開講せず、クラス 1、3、5 を開講した。

クラス 1 の児童は第 1 回目と同じメンバーで、クラス 1 のカリキュラムでは第 1 回目の支援内容と大部分が重なっていた為、5 回でクラス 2 までの内容を終了した。

クラス 5 は、第 1 回目と同様に文章読解、算数文章題、反対言葉、擬音語・擬態語の学習や絵日記を書いた。

反省点：学生ボランティアからはカリキュラムができ参加がしやすくなったという話を聞くことができた。しかし、カリキュラムの形はできたが、まだ教具が揃っておらず、カリキュラムに沿った指導案の例を提供しても、指導する児童に合わせ指導方法を変えていくため、考えなければいけない点も多い。



クラス 3 では 1 回で教える量が多く、時間内に収まらない時もあった。これは、クラス 4 でも同様のことが起こる可能性が考えられる。

児童に基礎学力を固め定着させるため、また時間に余裕を持たせるため、もう 1 クラス増やすことを検討している。このカリキュラムは改善が必要である。

(4) 今後の展開

第 3 回目が 2008 年 1 月 16 日から 5 回の予定で毎週水曜日に行われる。実際にカリキュラムに沿って授業を展開していったが、改善点も見つかって第 3 回目が始まるまでには改善し支援にあたっていきたい。

来年度に関しても、今年度と同様に 1 ターム 5 回で年 3 回行っていくことになっている。今後は、さらにカリキュラムの充実を図り、飛躍させていきたい。また、参加学生、児童の学びの場として充実を図っていきたい。

ことができ、実際に小学生に授業をする経験ができるということを魅力に感じ、早速今年の6月から参加させてもらうことになった。

実施したこと

日本語教室は、週に一度豊明市立双峰小学校で行なった。参加したのは1年生から2年生までの外国人児童の中の希望者で、主にブラジルや中国からの児童およそ10人だった。日本語のレベルに合わせて3～4のグループに分けて日本語の指導を行なった。教材は日本語学級のテキストを参考にし、プリント学習をしたりゲーム感覚で学べたりするようなものを自分で作って学習に利用した。例えば、それぞれの面に乗り物のイラスト（自転車、車、救急車など）が書かれたサイコロと、場所のイラスト（学校、病院、マクドナルドなど）が書かれたサイコロを児童に振らせ、「～で～へいきます。」という表現の練習をさせた。また、これまでの日本語教育で使われていた教材や、市販の幼児用の教材も利用した。



日本語教室で身についたこと

日本語の授業は初めての経験だった。どんなことから教えればいいのかかわからず、先輩と相談しながら、教材や指導法を考えた。しかし少しずつではあるが、自分で教材を考えたりして工夫できるようになった。また、これまでも日本語教育に携わってきた先輩の使う教材や指導法を見ることもとても参考になった。学習以外の面でも、子供はどのようなことに興味を示して、集中できるのかについて知るいい機会にもなった。例えば、子供は絵を塗ったり色を塗ったりすることが好きで、楽しみながらできる勉強のほうが集中できるといったことなどがある。

また、日本語教育に携わって、日本語教育がどれだけ必要とされているか、その問題点についても知ることができた。将来小学校の教師を目指しているので、その勉強のためにも引き続き日本語教育のボランティアに参加していきたい。

李永朋（学校教育専攻国際理解教育領域M1）

私は今年の九月から双峰小学校外国人児童日本語支援に参加させていただいた。外国人である私が外国人に日本語を教えるのは変だと思われるであろう。実は、私もみんなと違っている立場で参加するのが、いつもおかしいと思っている。しかし、私はずっと日本語教育に興味があり、大学四年間も日本語教育

について勉強してきたので、このような支援活動はちょうどいい実習になると思って、積極的に頑張っている。

近年、外国人が増えるとともに、外国人児童も増えてきた。したがって、外国人児童の学校教育も注目され、研究が進んでいる。学校内で取り出し授業をする学校が多く見られるが、双峰小学校の場合は、放課後1年生から3年生の外国人児童を対象にし、45分集中的に日本語を勉強するプログラムである。

私はまだ、五回しか参加していないが、いろいろ勉強になった。初めて子どもたちに会ったとき、半分ぐらいの子どもが日本人の子どものようにしゃべっていた。それに大変驚いた。しかし、日常会話から離れると、やはり難しく、わからないことがわかった。自分も日本語を勉強した経験があるので、子どもたちの、言葉がわからない気持ちもよくわかるし、何が一番知りたいのか、どうやって勉強すれば習得しやすいのか、よくわかる。子どもたちの気持ちがわかるからこそ、手伝ってあげたい気持ちがますます強くなった。

しかし、外国人の子どもに日本語で日本語を教えることは簡単なことではない。私は勉強の経験があるし、日本語教育の専攻だから、大丈夫だと思ったが、現実には上手くいかないときが多い。一番印象に残っているのは、ブラジル出身の一年生の女の子に場所の名前を教えた時のことである。コンビニやマクドナルドなどのカタカナ語は彼女にとっては苦手だった。これらの言葉を書いてももらったとき、「カタカナが嫌い。平仮名で書くよ」と言った。そのときこれらの言葉はどうしてカタカナで書かないといけないのかが説明できなかった。いや、納得できるように説明できなかった。悔しかった。

いろいろ大変なこともあるが、子どもたちは放課後に関わらず、勉強の意欲が強く、「もっと教えて」「来週も来るよね」「先生ともっと勉強したい」などの言葉を聴くと、自分も元気になり、頑張れる気がする。

これからも、卒業まで子どもたちと一緒に勉強していきたいと思っている。

岡本朋子（初等教育教員養成課程人文社会系国語専攻2年）

私は2年生になったら、将来のことも見通して、子どもと関われるボランティアをしたいという思いがありました。そんなときにサークルの先輩から教えていただいたのが外国人児童の日本語学習支援のボランティアでした。最初は、知立東小学校のマスマス教室に参加するつもりで登録しましたが、豊明の双峰小学校のボランティアを紹介していただき、そちらに参加させていただきました。双峰小学校での支援はあまりやり方が決まっておらず、私たちが考えたやり方で日本語の勉強をするという内容でした。授業内容を決めるのも、授業をするのも、教材を作るのも私たちの仕事でした。最初は、児童の実態も分から

ず、どんな授業をしてあげれば児童のためになるのか戸惑うこともありました。リソースルームの先輩方が助けをくださり、また、時間を経るごとに児童が必要としているものが分かり、授業を作れるようになりました。授業の内容は、からだの部分の名前や教室にあるものの名前、日常生活で使うあいさつ、自分の気持ちを伝える言葉、ひらがなの文字についてやりました。ゲームなどを利用して、より児童が親しみやすいように工夫しました。授業で扱う内容は生活にすぐに役立つものを中心に選びました。その中で子どもたちが一番興味を持ったのは意外なことにもひらがなの勉強でした。ひらがなは、家庭や学校でも学習しているからだと考えられます。児童については、日常会話にはほとんど支障がないように見える子から、全く日本語が話せないような子まで様々なレベルの子がいました。支援を通して一番感じたことは、児童たちの成長が目覚ましいということです。授業を行った児童の中に、日本に来て一週間くらいの子がいました。最初の週はこちらから話しかけても分かっていないような顔をするばかりでしたが、次の週には日本語で積極的に話しかけてくるということがありました。授業では教えていない言葉を覚えて、話しかけてくれることもありました。児童たちは好奇心旺盛で日本語を学ぶ意識が高く、学んだことをすぐに実践する意欲がありました。また、外国人ならではの感じたことですが、出身国の国民性によって、授業への取り組みの姿勢に違いがあると思いました。私の偏見かもしれませんが、授業への積極性や勤勉さが違うように感じました。外国人児童に日本語学習の支援を通して、教育的観点と、言語の指導の観点から様々なことを学ぶことができました。

3-3-3 放課後教室の成果と課題 外国籍児童学習支援教室について

(木村吉男：豊明市立双峰小学校)

1 成果

- ・個々の児童の日本語の能力に応じた指導により、算数だけでなく日本語の習得度も高まった。
- ・少人数指導により、児童はきめ細かな指導を受けることができた。
- ・指導にあたる学生さんの人柄が大変よく、熱心に指導して下さるので児童は毎回楽しく学習することができた。
- ・本校の日本語指導担当教員が、日本語指導の方法について多くのことを学び、指導に生かすことができた。

2 課題

- ・実施時間中に、都合により本校職員が同席できないことがあった。
- ・指導中に児童同士で喧嘩が起こることがあった。人との関わり方についての指導を強化していきたい。
- ・指導終了後の下校時に、児童クラブへ行く児童が勝手に自宅へ帰ってしまうことがあった。教室から出た後も、下校まで確実に見届けるようにしている。

3 要望

- ・1～3年を対象に実施していただいているが、本校には4年以上にも日本語が十分に理解できない児童が多数在籍している。日本語指導だけでもよいので、対象学年を拡大していただけるとありがたい。

4 その他

- ・立ち上げ時に、保護者向け案内文書を豊明市ポルトガル語通訳者に依頼したが、豊明市ポルトガル語通訳者は日常的に多忙を極めているため、翻訳に時間がかかった。